アルク日本語教師養成講座
NAFL選書

日本語の時制とアスペクト

町田 健

アルク

NAFL選書

日本語の文法プロジェクト

立教大学図書館
蔵書章

町田 健

アルク

町田健（まちだ　けん）

成城大学文芸学部助教授

略歴　1957年生まれ。東京大学文学部言語学科卒業。81年同大学大学院人文学科研究科修了。言語学修士号取得。86年同博士課程を中退し、同大学文学部言語学研究室助手、愛知教育大学教育学部総合科学課程日本語教育コース助教授を経て現職。

論文　「イタリア語の過去未来について」（『イタリア学会誌』vol. 32〈イタリア学会〉所収）、「古フランス語における単純過去の半過去的使用の由来」（『ロマンス語研究』vol. 18〈ロマンス語学会〉所収）、"La distribution des temps verbaux dans le texte en ancien provençal"（『言語研究』vol. 91〈日本言語学会〉所収）

NAFL 選書 9

日本語の時制とアスペクト

1989年10月31日発行　1993年4月15日　第2刷発行　定価2,700円（本体2,621円）

著　者　町田健

発行者　平本照麿

発行所　株式会社アルク

〒168　東京都杉並区永福2-54-12

電話　03-323-1001（書店営業部）

03-323-5514（日本語出版編集部）

印刷所　凸版印刷株式会社

©1989 Ken Machida

Printed in Japan ISBN4-900105-96-1 C1381

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

目　次

序　章……1

1 はじめに……2

2 時　　制……4

3 アスペクト……9

4 日本語の時制・アスペクトをめぐる問題……17

第1章 動詞句のタイプ……23

1 状態動詞……27

2 継続動詞……36

3 瞬間動詞……44

4「第四種」の動詞……50

第2章 時　　制……53

1 時制体系……54

2 主節の時制……57

3 従属節中の時制……101

第3章 アスペクト……147

1 日本語のアスペクト形式……148

2「テイル」形……155

3「テアル」形……164

参考文献……169

あとがき……171

索引……172

装丁　熊谷博人

序　章

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1　はじめに

人間の言語は、外界における事象や話者の思考・信念、言い換えれば「世界」を記述するものである。記述されるものが、「犬」とか「花」などのような、世界の中に存在する「もの」であれば、哲学的あるいは物理学的な議論はさておき、そこに「時間」の介在する余地はない。ところが、言語表現が「世界において成立している事象」を描写するために「文」という形をとると、そこには必ず時間という要素が入り込んでくる。なぜなら、我々人間にとって世界は変化するものであり、変化があることにより時間が認識されるものだからである[1]。

（1）　私の犬が鳴いている。

（2）　その花は今朝開いた。

文（1）と（2）は、「犬」と「花」が世界の中のある特定の対象を指示するように限定し、その対象についてのある特定の事象を記述したものであるが、ある特定の対象について、それに関する特定の事象を記述するためには、その事態がある特定の時点（ここではそれぞれ「発話時点」と「今朝」）において成立するものでなければならない。

（3）　犬は吠える。

（4）　花は美しい。

文（3）と（4）は、いわゆる「総称的」な表現で、（1）、（2）のようにある特定の時点においてしか成立するものではなく、どの時点においても成立する性質のものである。そこで「超時的」などとも言われるのであるが、そもそもこのような文が言われるためには、「犬が吠える」、「花が美しい」という事象の成立が、論理的にはあらゆる時点において検証されていなければならないのである。つまりこれらの文は、その記述する事象がすべての時点において「真」であることを主張するものなのである。従って、やはり時間と無関係で

あるとは決して言えない。

2 時　　制

ところで時間は、常識的には過去から未来へと過ぎ去っていく直線としてとらえられる。これとは逆に、未来が次々に現在となっていくという考え方もできるが[2]、いずれにしても、時間を方向性をもつ直線としてイメージするのが、一般的に最も受け入れられやすいであろう。さて、ある事象に内在する時間という要素を言語的に表現しようとする場合、そのような時間的直線（以下「時間軸」と呼ぶ）のどこにおいて成立しているのかを明示する方法をとるのが便利であるのは言うまでもない。そのうち最も厳密な方法は、それが成立した時点をそのまま記すというものである。

（5）　1954年9月19日午前3時34分53秒…［谷沢淳三生まれる］

（6）　1989年3月12日午後8時3分3秒…から1989年3月12日午後9時59分58秒…まで［町田健テレビを見る］

（5）のような、個人の出生、死亡あるいはロケットの打ち上げなど、それが成立した時点を厳密に述べることに意味がある場合には、この方法を使用することもできるかもしれないが、ロケットの打ち上げなどのような場合以外は、秒以下の時点を記す必要があるとも思えない。また（6）のように、ある個人の日常生活を描写する文において、それが成立した時点（ここでは時間的幅）を厳密に記すことは、裁判のような特別な場合を除けば、ほとんど意味がない。しかも日常生活において、いくつもの文を連続して使用するときに、その文の前にいちいち「～年～月～日～時～分～秒」などと言っていたのでは、まことに不経済である。また、このような時間の認識および表示の仕方が人間にとって基本的なものであるとも思えない。

やはり、人間にとって基本的な時間区分といえば、発話時点である「現在」、現在より前の時点である「過去」、現在より後の時点である「未来」であろう。人間の日常生活においては、ある事象が現在において成立しているのか、過去

に成立したのか、未来に成立する、あるいはすると思われるのかが区別できれば、その事象に関する時間的情報を伝達する上で大きな誤解を与えることはない。従って、「現在」、「過去」、「未来」という概念を語彙化して、事象を記述する文に付加すれば、その文がどの時間区分において成立しているのかを、適切に言語化できることになる。日本語ならば、「現在」に対しては「今」という副詞（あるいは名詞）があり、「過去」に対しては「かつて」、「以前」、「さっき」など、「未来」に対しては「そのうち」、「いつか」などの副詞がある。また、「昨日」、「今日」、「明日」、「～前」（「3日前」など）、「～後」（「1時間後」など）のように、基準となる時点である現在から、事象が成立する時点がどの程度の時間的隔たりをもっているのかを示す副詞類もある。さらに、もし必要ならば「過去の過去」や「過去から見た未来」（「太郎は花子が3日後に来ると言った」の中の「花子が3日後に来る」という事象）などの、より複雑な時間的関係を指示する副詞を作り出すことも可能である。

このような、時間軸上の時点を指示する副詞によって、事象が時間軸上に占める位置を示すという方法は、適切な語彙形式を用いればそれで十分に機能するものであり、事実中国語などではこの方法がとられている（木村 1982）。しかし、日本語を含む世界の多くの言語では、上に挙げたような「時の副詞」は時点をより正確に指示する場合に使用される形式であり、時点を示す主要な形式は別に存在する。

その形式とは、文を構成する必要成分であり、かつ時間的概念を表示する部分である「述語」中の要素（主として動詞）の形態的変化である。これを「時制」（あるいは「テンス」）という。時制は従って、文の表わす事象の時間軸上における位置を示すという機能をもつ点では、時の副詞と同じであるが、それを表層のレベルで表示する形式が述語であるという点で異なっている。

時制を示す形態的方法としては、英語の come「来る」と came「来た」、ラテン語の venit「彼は来る」と vē-nit「彼は来た」のように語幹母音の変化するもの、英語の go「行く」と went「行った」、ラテン語の legit「(彼は）読む」と lexit「(彼は）読んだ」のように、語幹自体の変化するものなどもあるが、日本語は膠着語であるので、英語で過去を表示する -ed と同様

に、語幹は変化せず、接辞を付加するという方法がとられる。具体的には、語幹に助動詞の「タ」[3] を付けて過去形が、語幹に接辞の「ル」を付けて現在・未来形が作られる（独立した「現在形」、「未来形」が日本語に存在しないことについては後述）。

ところで、世界の言語に一般的に見られる基本的な時制は、Comrie (1985) によると、発話時点を基準とした「絶対時制」(absolute tense) としては、「現在」、「過去」、「未来」の3つを設定すればよいとされている。しかし、上にも少し触れたように、ある過去あるいは未来の時点を基準として、その時点から見た「過去」や「未来」を指示する必要性もある。これらの時制は、発話時点という絶対的な基準点がないので、Comrie (1985) では「相対時制」(relative tense) と呼ばれている。伝統的英文法では、過去より前の時点は「過去完了」、未来より前の時点は「未来完了」と呼ばれているが、第2節で述べるように、「完了」という概念は時制ではなく、後述する「アスペクト」に近い性質をもっていると考えられるので、本書では Reichenbach (1947 : 309)[4] にならって、それぞれ「過去以前」、「未来以前」という名称を採用する。また、「過去から見た未来」については、伝統的英文法では一般的な名称がないが、これも上掲書にならって「過去以後」とする。さらに、「未来から見た未来」は「未来以後」となる[5]。

発話時点をS、事象をEと表示し、「同時」という概念を＝で表わすことにし、左側にある記号が右側にある記号よりも時間的に先行するというように決めておけば、「現在」は S=E、「過去」は E-S、「未来」は、S-E と表示することができる。絶対時制はこのように、発話時点と事象の占める時点との時間軸上の位置関係で表わすことができるが、相対時制はこれだけでは表示できない。例えば、「過去以前」を表示するためには、発話時点よりも前の、別の過去の事象を想定する必要がある。このような、相対時制を定義するための基準となる時点のことを「基準時点」(reference point) というが、これをRという記号で表わせば、「過去以前」は E-R-S、「未来以後」は S-R-E と表示することができる。

同じように「過去以後」と「未来以前」も、R-E-S、S-E-R と表示できそ

うであるが、この場合には少し問題がある。例えば R-E-S について考えてみると、この表示では事象が発話時点以前に成立することになる。ところが次の2つの文を見てみよう。

（7）a. 太郎は昨日、今日次郎の家に行くと言った。

　　b. 太郎は昨日、明日次郎の家に行くと言った。

「（太郎が）次郎の家に行く」という事象は、（7）a. では発話時点（正確には発話時点を含む時間的区間）、b. では発話時点よりも後に成立するのだが、いずれも「過去以後」であることに変わりない。つまり、「過去以後」は、R-E-S だけでなく、R-E=S、R-S-E のように表示されなければならないこともあるのである。従って、「過去以後」を一般的に表示するとするならば、R—S＼E のようにしなければならないことになる。同様に、「未来以前」についても、S-E-R だけでなく、S=E-R、E-S-R という表示もありうるので、一般的には S／E—R という表示が適切である[6]。

これまでに述べてきたことを整理して、各時制の構造を記号を用いて表示すると次のようになる[7]。

絶対時制

　過去　E-S

　現在　S=E

　未来　S-E

相対時制

　過去以前　E-R-S

　過去以後　R—S＼E

　未来以前　S／E—R

　未来以後　S-R-E

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ここに挙げた時制は、あくまでも理論的に想定されるものであって、時制という形式をもつ言語がすべて、この7つの時制を形態的に区別しているのではない。時制形の豊富な英語にも「未来以後」を表わす形はないし、ラテン語にも「未来以後」がないほか、「過去以後」も、他の時制形のように、接辞の付加や語幹の変化で表示されないので、独立した時制形とは言い難い。日本語については第2章で論ずるが、「花子は木の下にいる」が「現在」を、「花子は来月結婚する」が「未来」を、「花子は翌日来ると言った」の中の「翌日来る」が「過去以後」を意味することを考えても、時制の体系は比較的単純であることが容易に想像される。

3　アスペクト

時制は、事象が時間軸上に占める位置を、発話時点あるいは基準時点との前後関係という観点から表示する形式であるので、この関係が一度決定されれば、選択される時制も原則として自動的に決定され、それ以外の時制を使用すると、事象の時間的性質を反映しない文が出来上がってしまう。例えば、「太郎が来る」という事象が昨日起こったとした場合、時制は「過去」以外ではありえない。従って、(8)a. のように言うべきであって、(8)b. では不適格な文となる[8]。

(8) a.　太郎は昨日来た。

　　b.* 太郎は昨日来る。

完結相と非完結相

一方、同じ事象でも、発話者がその時間的性質をどうとらえるかによってその描写のされ方が異なる場合がある。例えば、「子供たちが公園で遊ぶ」という事象が過去に成立したとしよう。この事象は本質的にある程度の期間持続する性質のものである。もし、その期間の中に視点を置いて、この事象の内部の様態、つまり子供たちが実際に遊ぶという具体的な行為に注目して文を作ったとしたら、(9) a. のようになるだろうし、この事象が成立したということだけに注目して、その内部の様態には関心を払わないとしたら、(9) b. のような文ができるだろう。

(9) a.　子供たちが公園で遊んでいた。

　　b.　子供たちが公園で遊んだ。

文 (9) a. と (9) b. は、「子供たちが公園で遊ぶ」という事象の描写としてはいずれも適切なのであり、「遊んでいた」と「遊んだ」という動詞の形の選択は、発話者のこの事象の時間的性質に対する見方の反映に過ぎない。この

ように、発話者の事象の時間的性質に対する見方を伝える形式を、「アスペクト」という[9]。

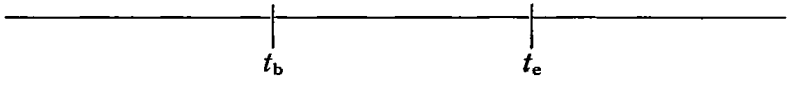
「事象の時間的性質に対する見方」と一口に言っても種々のものがありうるので、アスペクトに関しては、時制と比べると様々な分類がある[10]。ここでは、本書の以下の記述に関わりのあるものを主として取り上げる。

まず最初に挙げた、事象の内部の様態に関心を払うか払わないかという見方について考えてみると、事象の内部の様態に関心を払わない場合、その事象は1つの全体として、つまり「点」としてとらえられることになるから、「完了した」事象として提示されることになる。逆に事象の内部の様態に関心を払う場合は、その事象の開始点や終結点という局面は無視されるから、「未完了の」事象として提示されることになる。このことから、前者の見方を「完了の」(perfective) アスペクト、後者を「未完了の」(imperfective) アスペクトと言うが、本書では、後で述べる「完了」(perfect) と区別するために、完了のアスペクトを「完結相」、未完了のアスペクトを「非完結相」と呼ぶことにする。

ところで、事象は一般的に、ある時間的区間において成立するのであるが、それ以前の区間では事象が成立していないことはもちろんである。また、事象が成立する区間以後は、その結果が何らかの形で持続するのが普通である。例えば、「太郎が本を読む」という事象がある区間の間成立したとすると、その区間以前は「太郎が本を読む」という事象は成立していない、つまり「偽」であるし、その区間以後は、太郎が本を読むことによって太郎の内部に生じた変化の状態が成立することになる。

「太郎が本を読む」を「読む（太郎、本)」と表現し、「太郎が本を読むことによって生じた状態」を「読む＋(太郎、本)」と表現すれば、この事象の時間的構造は、次のように図式化される。

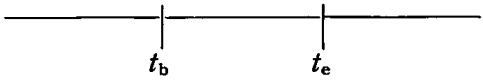
(10)　～読む（太郎、本）　　読む（太郎、本）　　読む＋(太郎、本)



ここで「～」の記号は、「否定」を表わし、t_b、t_e の記号は、それぞれこの

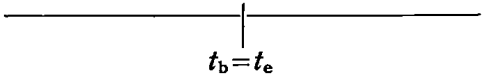
事象の開始点と終結点を示すものである。従って、事象をE、事象の結果をE＋のように表わせば、事象の時間的構造は一般的に次のように表示できる[11]。

(11)　～E　　E　　E＋



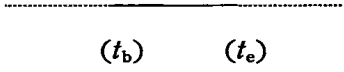
事象の時間的構造を上のようにとらえるとすると、「完結相」では、Eが点として提示されているのだから、t_b と t_e が見かけ上一致することになる。従って、完結相でとらえられた事象は、次のように表示することができる。

(12)　～E　　E　　E＋



また、非完結相では、事象が成立していたことだけが提示されているのだから、このアスペクトによってとらえられた事象については、～Eと E＋は存在せず、しかも、Eが真である区間の開始点と終結点である t_b と t_e も明示されない。従って次のような表示になる。

(13)　E



事象の開始する局面を示す「起動相」(inchoative) や、事象の終結する局面を示す「終止相」(terminative) あるいは「終動相」(egressive) というアスペクトが主張されることも多いが、これは、草薙 (1983：172) の言うとおり、「ある事象が始まる」あるいは「ある事象が終わる」という別の事象の完結相に還元できるので、独立したアスペクトとみなす必要はなく、完結相の特殊な場合と考えてよいと思われる。実際、起動相や終止相は、日本語では「太郎は本を読み始めた」とか「太郎は本を読み終わった」のように、「～始める」、「～終わる」という動詞を用いて、語彙的に表現される場合が多い。「太郎は相対性理論を知った」という文は、「太郎が相対性理論を知る」という事象の起動相を示しているかのようであるが、そもそも「太郎が相対性理論を知る」という事象そのものは、「起動」という局面以外には示すことができる局

面はないのであるから（「＊太郎は相対性理論を知り終わった」などとは言わない)、「～始める」という動詞がなくても、やはり完結相に含めることができる。

反復と習慣

事象がある時間的区間において反復される場合がある。例えば次のような文である。

(14)　花子はその家のドアを叩いていた。

(15)　その日は100機もの飛行機が離陸した。

文（14）では、「花子がその家のドアを叩く」という事象が、文（15）では、「飛行機が（1機）離陸する」という事象が反復されている。「叩く」という動詞は瞬間的な事象を示すのが基本的な意味であり、従ってそれ自体は1回で終わるのだが、「叩く」という行為は同一の主体が容易に反復することが可能なので、「テイル」と結びつくと「反復」という意味が生じてくる。また、「離陸する」という動詞は、単独の主体では反復することの難しい行為を意味しているが、「100機もの飛行機」という複数の主体を示す名詞句が主語となっているため、文（15）ではやはり反復という意味が生じている。ただ文（14）と(15)で違っているのは、文（14）では何度反復されたかが明示されていないのに対し、文（15）ではそれが100回であることが明示されているということである。つまり、文（14）では、事象の開始点、終結点を含まない部分が提示されているのに対し、文（15）では，事象が全体としてひとまとまりで提示されているのである。従って、文（14）で表わされているような反復は非完結相に属するとみなすことができるが、文（15）におけるような反復は、完結相に属すると考えなければならない。

「反復」はこのように、「完結・非完結」の両方の相にまたがるものであるので、「反復相」(iterative) という独立のアスペクトとして設定すべきものであるように見える。しかし、文（15）をよく考えてみると、「その日100機もの飛行機が離陸する」という事象自体に反復性があるのであって[12]、ある事象を特別の見方で眺めてみた結果反復性が生じたという性質のものではない。アス

ペクトというのは、事象の「見方」を提示する形式であるのだから、ここで問題となっている反復は、従ってアスペクトと考えることはできない。要するに文（15）は、反復された行為を示す事象の完結相を提示しているに過ぎないのである。一方、文（14）では、「花子がその家のドアを叩く」という事象は、それ自体では1回で終わる行為を表わしている。1回で終わる行為をどう見ても反復されたものとしてとらえることは不可能であるから、やはり文（14）で意味されている反復もアスペクトとみなすことはできない。

要するに「反復」とは事象自体のもつ性質であって、それを異なったアスペクトで表示することはできても、それ自体をアスペクトとみなすことは、アスペクトの定義に合わないのである。次の（16）a.、b. では、反復された行為が、それぞれ完結相、非完結相で提示されている。

（16）a. 太郎はその家のドアを何度も叩いた。

　　b. 太郎はその家のドアを何度も叩いていた。

ある程度長い期間にわたって反復される事象は「習慣」と呼ばれ、これを「習慣相」(habitual) と言うことがある[13]。確かに、同じ長期間にわたる事象を、ある人は習慣とみなすが、別の人は習慣とはみなさないということはありうる。この点では「見方」の違いと言えないこともないが、ある特定の発話者がある事象を習慣とみなしてしまえば、それは習慣以外でありえないのであって、それ以外の見方は出てこない。つまり、発話者が特定化されれば、その事象が「習慣相」以外のアスペクトで提示されることはないのである。アスペクトとは、発話者が同じであっても、同じ事象の異なった見方の反映でなければならないから、やはり「習慣」もアスペクトに属するとはみなすべきではない。これも事象自体の性質に過ぎないのである。「反復」の場合と同じように、同一の習慣的事象を、完結相と非完結相の両方で提示することもできる。

（17）a. 太郎の父親はその頃よく魚釣りに行った。

　　b. 太郎の父親はその頃よく魚釣りに行っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com